

仔牛こウシ

仔牛がある日 お父さん牛と お母さん牛のところへ 行って、

「父ちゃん 母ちゃん、あたい 体からだの中が むじゅむじゅすんの。」と いいました。お父さん牛も お母さん牛も すっかり よろこんで よだれを たらしました。そして お母さん牛が いいました。

「坊ぼうや その むずむずするのはね、いまに 坊やの 体から 何かは はえてくるよ、さあ それでは、あの 丘おかの 南の なの花畑の中 にはいつて、じつと すわって いなさい、何か はえて くるまで 待って いなさいね。」と いいきかせて、仔牛を ひとりきり 送って やりました。

仔牛が 行って しまうと お母さん牛は むねを おどらせながら お父さん牛に いいました。

「ね、あの 仔こは 世界中で いちばん 美しい 仔牛だから、いまに きっと 肩かたの下から いつか ほら 丘おかの ふもとで 池の上に うかんでた あの 白鳥はくちょうのような 美しい 白い 羽はねが 二つ はえますよ。」けれど お父さん牛は 大きな 顔を 横に ふりました。

「なにを ばかな。けものに 羽など はえるもんか。けものに はえる ものは 角つのに きまつてる。だが あれば、なかなか 勇ましい やつだ。だから きっと 鹿しかの 角つのみたいに りっぱな、枝えだの ある 角が できるだろう。」

「おお いやだ、あんな みつともない もの。あんな いやな ものが あの かわいい 仔こに はえる ものですか。きっと 羽が はえます。もし あの 仔こに 羽が はえないなら わたし、この しっぱを あげても よろしいわ。」

「そんな へんてこな しっぱなんか いらないよ、縄なわつきれの方が よっぽど ました。お前まへが そう いうなら わしは こう いう。もし あれに 鹿の 角が はえないなら、わしは わしの ひづめを やろう。」すると お母さん牛は 大きな 顔を できるだけ しかめて、

「そんな ひづめより 道ばたに おっこつて いる お腕わんの かけらの 方が ましですわ。」と いいました。

丘おかの 南の なたね畑の 中で じつと まつて いた 仔牛こウシの 頭に、やがて 小ちやく はえて きたのは、白鳥はくちょうの 羽はねでも なく、 鹿しかの 角つのでも なく、ふつうの 牛の まるい 角つのでした。仔牛が お父さん牛と お母さん牛の ところへ かえつて くと ふたりの 親牛は 眼めを しばたたいて よろこびました。そし

て いいあいました。

「まあ、よかった。でも なんて りっぱな 牛に なった ことだろう。」

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員